

琉球大学学術リポジトリ

特集〈凶像資料論〉に寄せて

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2015-12-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 武井, 弘一, Takei, Koichi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/32805

特集〈図像資料論〉に寄せて

武井 弘一

Preface: On Iconographic Archives

Koichi TAKEI

高等学校の日本史教科書にもミスがある。

図1には、寛永14年(1637)にキリスト教徒らが蜂起した、有名な島原の乱(島原・天草一揆)が描かれている。増田時貞(天草四郎)をリーダーに原城跡に立てこもった一揆勢は3万人あまりで、これを鎮圧するために翌年の総攻撃で動員された幕府軍は4倍の約12万人にも達した。筑前国福岡藩の分家にあたる秋月藩主・黒田長興も、2,000人あまりの家臣を率いて、この戦闘に加わった。長興は、戦国武将で名高い黒田長政の三男である。討ち死に32名・手負い345名というから、家臣5人のうち1人が犠牲となったものの、なんとか無事に凱陣することができた。その200年を祝うため、藩主・長元が描かせたのが、図1に示された『島原の乱図屏風(島原陣図屏風)』である¹。

図1



この絵画は、日本史の教科書でどう扱われているのか。高等学校で最も採択されている教科書を開いてみよう。図1の部分に「原城を攻める幕府軍」というタイトルをつけて、このように解説されている。

「図は秋月藩の黒田氏が、原城攻撃に向けて陣を構えているところ。」²

このキャプションは正しいのだろうか。図1の左半分には描かれているのは、原城の本丸から離れたところにある砦で天草丸という。右上の黒田勢の突入によって、天草丸の入り口付近は制圧されようとしており、一揆勢は本丸と連絡できず、ここ天草丸に孤立してしまった。すなわち、ここに描かれているのは、籠城している一揆勢なのである。

この事実を確かめるべく、天草丸の内部を拡大した図2を読み解いていこう。籠城している人びとは、甲冑をまとい、鉄砲や鑓といった武器を持つ者が多い。最終決戦が近づいている、そんな雰囲気だ。気づいてほしいのは、真ん中にある女性たちの姿である。お粥のような食事を用意し、それを柄杓で配っている。黒田勢は武士団なので、女性が参加しているとは考えられない。塀のまわりの幟にも注目してみよう。『旧約聖書』の神エホバをさす「天帝」と記されていることをふまえると、籠城しているのがキリスト教徒であることは疑いない。左下の塀の外には、縄で両手を縛られた人物がいる。南蛮絵師として著名な山田右衛門作である。彼は一揆に参加したものの、闘争には懐疑的であったため、幕府軍に内通してしまう。裏切ったことが発覚して、こうして一揆勢に身柄を拘束されているのである。図2の細部を読み解いていけばいくほど、ここに描かれているのが一揆勢で間違いないことが明らかになっていく。

図2

したがって、教科書のキャプションを訂正すれば、以下のようなだろう。

「図は原城にたてこもった一揆勢が、秋月藩黒田氏の攻撃を防いでいるところ。」

この事実から、絵画の取り扱いをめぐる、大きな課題が2つ浮かびあがってくる。

①本文重視の姿勢

教科書の本文ならば、歴史用語がテストに出題されるなどのこともあり、一言一句チェックされる。それこそ、ミスなど許されない。にもかかわらず、絵画のキャプションが間違っているということは、本文を重視するあまり、絵画を軽視していることを意味しよう。

②検証のあいまいさ

絵画そのものも、史実を正しく反映しているとはかぎらない。前述したように、これは島原の乱から200年後に描かれたものである。しかも、攻める黒田家が、一揆勢が立てこもっていた天草丸の内部のことを、落城前にどれだけ詳しく理解できるというのか。絵画は史実どおりなのか、

そのことを検証もせず、安易に教科書に掲載している可能性が高い。

このような課題は、何も教科書だけではなく、一般書から研究論文にいたるまで、よくみられることではないか。たとえば、ある本を書いたとしよう。その時に読者へアピールする方法は、明らかに本文である。絵画を使ったとしても、本文を理解しやすくするための、いわば挿し絵として利用しているにすぎない。しかも、その挿し絵も、どこかの図録から見栄えのよいものを探し出してくる、これはよくある話である。

そこで本特集では、発想を逆転させて、本文ではなく、あえて絵画を含めた図像資料そのものをクローズアップしたい。題して図像資料論である。図像とは狭義には美術作品、とくにキリスト教美術作品のことを指すが、ここでいう図像資料とは絵画・写真・ポスター・絵ハガキ・地図・漫画・デザインなどを含めた広い概念として用いている。しかも、美術作品のように芸術的な価値が高いものともかぎらない。

私たちが所属する琉球大学法文学部人間科学科地理歴史人類学専攻課程の最大の特徴を生かして、地理学・歴史学そして人類学という3つの学問分野から図像資料を読み解いていけば、どのような点が明らかになるのか。本特集では、絵画・映像・写真・地図を用いて、図像資料そのものを分析し、あるいは研究するうえでの有効性を論じている。これらの研究成果をとおして、図像資料の魅力だけではなく、学校教育の教材としても大いに活用すべきことを、ここ沖縄から発信することにしたい。

【註】

¹ 岡本良一「島原の乱図屏風について」(『普及版 戦国合戦絵屏風集成』第5巻、中央公論社、1988年)。

² 石井進・五味文彦・笹山晴生・高埜利彦(ほか9名)『詳説日本史 改訂版』(山川出版社、2006年文部科学省検定済)174頁。